

## [わたしと美術館]

## 古美術品の撮影法 (2) 陶磁器

美術写真家 中川 邦 昭

前回では古美術品の撮影の中で、平面的なもの、特に絵画作品について述べましたが、今回は立体的なものについて述べてみたいと思います。

立体的なものといっても多岐にわたっています。彫刻、陶磁器、漆器、金工品、硝子器などがありますが、特に愛好家が多い陶磁器をとりあげて、その撮影の要点について説明いたします。

前回でも述べましたが、撮影する前に、作品の状態を確かめ、次に材質を調べておきます。普通、「陶磁器」といっておりますが、これは陶器と磁器とを総称した言葉です。なお、陶器には土器と炆器(備前焼など)が含まれます。陶器と磁器とでは素地(きじ)の材質が異なっています。ですから、陶器か、磁器かで、作品から受ける感じは違ったものがあります。陶器は手にとってみますと温かい感じがしますし、表面も何かやわらかい感じがします。それに比べて、磁器は冷めたく、高尚で人を寄せつけないものがあります。いずれにしても、作品の材質感をいかにして写真で表わすかが、この種の写真のポイントといえましょう。私は、陶器はやわらかい調子で、磁器はかたい調子で仕上げるようにしています。

立体的なものは、絵画のような平面的なものや違って、見る角度によっていろいろな表情を私たちに見せてくれます。ということは、一つの作品でも、撮影者の個性の違いによって、異なった写真ができるということです。しかし、ここでは美術写真という制限を考慮して撮影しなければなりません。

一つの作品をあらゆる角度から撮影することも、作品の研究や記録の上で必要なことであり、美術写真の目的の一つといえますが、ここでは一視点からの撮影ということで話を進めたいと思います。

まず、撮影者はその作品の理想

的なイメージを心に描きます。そして、そのイメージを写真に移しかえるわけですが、次に具体的に述べましょう。

陶磁器には鑑賞の見所となる面が必ずあります。図柄があれば主要な文様がそれに当ります。茶道では、これを「景色(けしき)」とか、「景(けい)」とか呼んでいます。それを撮影のときの正面に定めます。皿のような平板な器物で、山水花鳥人物などの文様がある場合は、特に天地の位置を確かめます。次に、この種の撮影で最も重要なことは、その器物が最も美しく、整ったかたちに見える視点を見つけて出すことです。景色(文様)とかが一番よいバランスで見える視点です。その視点から見られる像が、撮影者がはじめにいだいたイメージに合えばよいわけです。ここではあくまでも美術写真ですから、作品が主で、撮影者は従の関係であることを忘れてはいけません。作品の特性や芸術性を理解して、忠実に正確に画像化することが何より大切です。撮影者の意図を表現するために、作品を脚色したりすることはさげなければなりません。

次に、「染付山水文瓢形徳利」(有田窯、江戸時代、磁器)を例にあげて説明します(写真)。

作品の大きさを考慮に入れて、ファインダー内での像の大きさ、まわりの空間とのつり合いを調節します。焼付けのときも同様です。小さな作品が異常に大きく見えたり、また大きいものが小さく見えてはいけません。

立体物の撮影で、最もむづかしいのは照明の当て方です。シャドウ(影の部分)が暗くなり過ぎたり、またハイライト部(明るい部分)に光を当て過ぎてハレーションをおこしていたりするのはよくありません。美術写真は正確な記録を使命としていますから、



(1)カメラより90度



(2)カメラより45度



(3)カメラより0度

カメラとライトの角度、ただしフラットライトはカメラ位置のライト(0度)

細部まできっちり写っていないと均一に写り過ぎてはいけません。前方からのフラット・ライティングをやれば全部写り込みますが、作品が平板に見え、立体感がなくなります。全てがきっちり見え、それでいて明部、暗部がある像、いいかえればメリハリのある像が一番よいわけです。

さて、照明の際、生のライトを直接当てることはしません。影が強くなるためです。そのために、ライトの前にトレッシングペーパーを置いて、光を弱めて当てます。また、銀色に塗った反射傘を用いて、間接的に照明するやり方もあります。これは特にストロボ撮影のときに効果を発揮しますが、タングステンライトの場合も有効です。作品の立体感を平面の写真の中でいかに見せるかが問題ですが、これは作品に当てるライト(三灯以上を使う)の強弱によって解決します。陶磁器の撮影では紙のバックを用いますが、私はバックへの光を作品の前面よりも少し落してやります。そうすれば、作品が前に浮び出てきます。

また、レンズは少し長い目の焦点距離をもつものを使います。(一眼レフ用では、マイクロニッコールの105ミリレンズがよい)。長い焦点距離のレンズは引きが必要で、狭い場所では撮りにくいです。立体的に見える点ではすぐれています。前後の被写体のボケの具合



染付山水文瓢形徳利(最良の撮影)

で立体的に見せる補助をしてくれます。

ピントについては、被写体の前後の間で、三分の一前に当るところに合せます。

最後に、露出について触れておきます。露出は被写体自身が動くものでないため、十分時間をかけてやることができます。最近のカメラでは、絞り優先、シャッター優先というように、初めに絞りを決めるか、シャッターにするかで分れます。動くものでありませんから絞りを決めてから、シャッターを決めて下さい。大体1秒から4秒位の間で撮影するといいたいでしょう。(日本写真家協会会員)